

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate

vol.10

【特集】先回りする教育、私のビジョン

未来を見るために、足元を整える
—先回りする教育の再定義—

なぜ「オモシロがる」ことが教育の鍵なのか
私の考える「先回り」の教育

専任が語る

謎解きと心残り

「化粧の自由化」を自律性支援から考える

シンプルであるということ
～注文の多い学習指導要領とその周辺への異議～

教育の最新事情

型とその伝承、そして教育（三）
やわらかな制度としての「口伝」

【特集】先回りする教育、私のビジョン

未来を見るために、足元を整えるー先回りする教育の再定義ー

2

なぜ「オモシロがる」ことが教育の鍵なのか 私の考える「先回り」の教育

5

専任が語る

謎解きと心残り

9

「化粧の自由化」を自律性支援から考える

11

シンプルであるということ ～注文の多い学習指導要領とその周辺への異議～

13

教育の最新事情

型とその伝承、そして教育（三）やわらかな制度としての「口伝」

15

先輩はもがく、されど進む

17

Pickup News

19

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate

vol. 10

今号の特集も「先回りする教育、私のビジョン」です。学習指導要領の改訂議論が本格的に進んでいます。もし学習指導要領や教科書がなかったら、みなさんはなんのために、なにをやりますか？ 自分たちはどうありたいのか？ なにに抗い、なにを選び、なにをつくるのか？ 自分たちの軸が先、そのうえで学習指導要領を翻案すればいい、私たちはそう考えます。

そんな思いをもって育ててきた「先生による、先生のための、先回り研修会」（略して先3）。今号では、先3仲間に寄稿してもらいました。一人ひとりが考える先回り、この特集は続けていきます。みなさんも先回りの旅路、ご一緒しませんか？

【特集】

未来を見るために、足元を整える

—先回りする教育の再定義—

先回りの原点

「子どもを育てたいという願い

私が教育に携わる理由はただ一つ。「子どもたちが生まれ育った環境に左右されることなく自分自身の力で人生を切り拓いていくことを望む。そのための力を少しでも多く身に付けて欲しい。」そのサポートがしたいと想ったからです。常にこの想いを胸に教育という仕事をしています。

思考力、レジリエンス、他者に相談し頼る力、思考を行動に移す実行力、固定概念からの脱却、未来を見通す力、人生の選択に唯一の正解はないという感覚などを大切に、それらを子どもたちと関わる中で伝えることを意識してきました。小さな種をまく感覚で、いつか芽が出ることもあるかもしれないという淡い期待のもとに。

未来から逆算する教育と、研修現場での転機

では、私は教師としてどうあるべきか。子どもたちが将来社会に出た時の世の中を見据え、そこから逆算して現在の教育を構想することが必要であると考えてきました。いわゆるバックキャストिंगの視点です。子どもたちがどのような社会に出ていく

のか、その中で一人一人が自分の力で人生を切り拓いていくためには、どのような力が必要なのか。その問いを起点に、日々の教育実践を考え、取り組んできました。

文部科学省の示す「令和の日本型学校教育」をはじめ、次期学習指導要領においては2040年代をイメージし検討が重ねられています。ここ数年での生成AIの劇的な普及によって、世の中では様々なパラダイムシフトが起こっています。教育でも指導観、学習観の転換と言われていますが、これは教育のパラダイムシフトです。教師は常に世の中の空気を読みながらその転換点に敏感である必要があるのではないかと思っています。

一方で、主観ではありますが、こういう視点を持ちながら教壇に立っている教師は感覚的に多くはないと感じています。私はそこに対し、教師の意識や学びを変えなければ子どもたちの教育も未来も変わらないという危機感のもと、教師の学びを変えられるような研修が必要ではないかと考え、教員研修に携わることを希望し昨年度より指導主事になりました。幸い研修を行う部署に配属してもらえ、所属する自治体の研修センターで教員研修を担当しています。

担当しているのは参加必須の悉皆研修ではなく、学びたい人が自分で申し込んでくる研修です。

自治体の目指す施策の実現に向けた先進的な研修を進めていくのはもちろんのことではありますが、最近、研修業務を通して少し考え方が変化してきています。それは、ビジョンや強い想いを持つことは大切ですが、それを表出し過ぎると独りよがりになってしまうということです。それがどんなに良いビジョンだったとしても共感、理解を得ることができず、結果、何にもつながらず、かえって遠回りになってしまふ。先生たちの今に寄り添いながら進めていく必要があるのではないかと感じています。

そこに気づけたのは、とある研修運営での出来事がきっかけです。

それは、若手の先生を対象とした学級経営に関する研修でした。その研修は中堅の先生をファシリテーターとし、若手の先生方の悩みや困り感を出し合い、参加者同士でどのようなことができるかを協議し、しかもデジタルではなく模造紙にまとめていくいわば従来型の研修の内容です。

研修の終盤に差し掛かったところで協議したことが手書きでたくさん書かれている模造紙の写真を撮った

参加者が「僕、これ、今年のお守りにします」とつぶやきました。この言葉を聞いた瞬間、教員研修の価値に気づかされたのです。「そうか。研修って先生たちを励ましたり支えたりすることもできるんだ」と。

今までは、子どもたちの学びのために先生たちが学ぶ必要がある。そのため先進的な取り組みをし、未来を見据えた教育の在り方だけを追い求めている傾向が私自身にありました。しかし、この瞬間に、この考え

方は大切にしつつ、もっと先生たちに寄り添いながら、一緒に未来を見ていく方法があるのではないかと考えるようになりました。研修は「未来の教育を実現するための知識や方法」を届けるだけでなく、先生たちの不安を言語化し、支え、励ます場にもなり得る。先生たちが孤立せず、明日を迎えるための足場をつくることも、研修の重要な役割なのだ気づくことができました。

足元を整える先回り

―現場の困り感から始める

実際に、未来の教育を語りたと思う一方で、日々の業務に追われ、目の前のことに精一杯で苦しんでいる先生がたくさんいます。学校の状態

によっては研修に行く時間すら確保できない。いじめや不登校への対応に神経をすり減らし、保護者との関係性に悩み、余裕を失っている姿を見聞きする中で、ある問いが浮かぶようになりました。

未来を先回りすることも大切だが、まず解決すべき「今」もあるのではないか。

足元が不安定なままでは、視線を未来まで伸ばすことはできないのではないか。

これまでの私は、自分一人が未来を見ていければいい、どこかでその視点を示し続けられればいいと思っていたのかもしれない。しかし、みんなで一緒に未来を見ていくためには、まず

「今、何に困っているのか」に寄り添う必要があると思つたのです。そのことに、遅ればせながら気づき始めました。

未然防止としての先回り

―保護者対応を手がかりに

では、「今」の先回りとは何でしょうか。学校現場では、日々、迅速な判断と対応が求められます。いじめ、不登校などのトラブル対応、そしてそれらに起因する保護者対応など、目の前の問題に向き合い、やり方を

調整しながら状況を改善していくことは不可欠です。ここで重要なのは、問題が顕在化してから対応するのではなく、関係性と情報のやり取りを「前もって整える」こと、すなわち未然防止としての先回りです。

保護者対応を例に挙げます。近年、保護者対応の難しさが語られることは多いですが、教員側にできることはまだ多く残されていると感じます。

少子化が進む現在、子育ては多くの保護者にとって初めての経験です。子どもに関する判断材料も、自分の子ども時代や周囲の限られた事例に偏りがちです。その中で不安になるのは自然なことです。その不安がある

ということを前提として、教員はどれだけ想像力をもって向き合っているでしょうか。自分の子どもだったら、その対応で安心できるか。自分はこの学校や担任に子どもを預けたいと思えるか。こうした問いは、保護者の要望を無条件に受け入れることは別次元の、対応の質を点検するための視点だと考えます。

たとえば、いじめやトラブル対応で「確認します」で終わらせ、回答の目安や期日を示していない場合、保護者の不安は増幅します。時間が

かかる場合ほど途中経過や進捗を共有し、「次に何が起るか」を見通せる状態をつくることで少しでも安心をしてみようが必要で、また、問題が起こる前の段階で、気になる兆しが見えた時点で相談・情報共有を行うことも、結果的に大きな衝突を避ける先回りになると考えます。

さらには保護者への連絡が、問題が起こった時だけになってはいないでしょうか。そうなる学校からの連絡が保護者にとっては好ましいものではなくなります。子どもがしてくれた良いことや嬉しかったこと、成長を感じたことで連絡をしてみることも、学校からの電話へのイメージを変えることにつながります。そういった連絡をもらえて嫌な気持ちになる人はいないはず。保護者と同じチームとして子供たちの成長の目標を一緒に共有しながら関わるイメージです。

不安への共感と、専門性にもとづく説明を両立させることは、短期的には手間に見えるかもしれませんが、しかし長期的には信頼関係を築き、学校全体の安定をもたらす「回り道に見える先回り」になると考えています。

仲間と協働して未来を見る

―教師像と学びの文化

目の前の対応だけに追われ続ける
と、「なぜその対応をしているのか」
「どのような学校を目指しているの
か」という問いが置き去りになりま
す。改善のために対応しているはずな
のに、根本的な違和感が解消されな
い。だからこそ、対処療法的な改善
と並行して、前提となる本質的な価
値や目的を問い直し、教師同士で共
有し合うことが不可欠です。こういっ
たことを共有し合える教師同士の関
係性こそが、先回りを支える重要な
要素であると考えます。未来を一人
で見据えることには限界があります。

共に働く仲間と対話を重ね、それぞ
れの実践や迷いを共有する中で、多
様な教育観に気づくことができ、は
じめた視野は広がっていくのではない
でしょうか。

ここで、昨年示されたOECDの
ティーチング・コンパスに触れます。
ティーチング・コンパスでは、「複雑
性、変革、不確実性によって特徴づ
けられる時代において、教師の役割
はこれまで以上に不可欠なものとなっ
ている。今、生徒たちが、創造的で、
レジリエンスを備え、協働して変化を
起こす担い手となることを求められて

いるのと同様に、教師もまたそうであ
ることが求められている。」とされて
います。教師は個人としての力量だ
けでなく、同僚や組織との関係性の
中でエージェンシー（主体性）を發揮
する存在である、という考え方です。
私はこのエージェンシーという考え方
が好きです。なぜなら、一人ではな
く仲間とともにという考え方が前提
にあるからです。

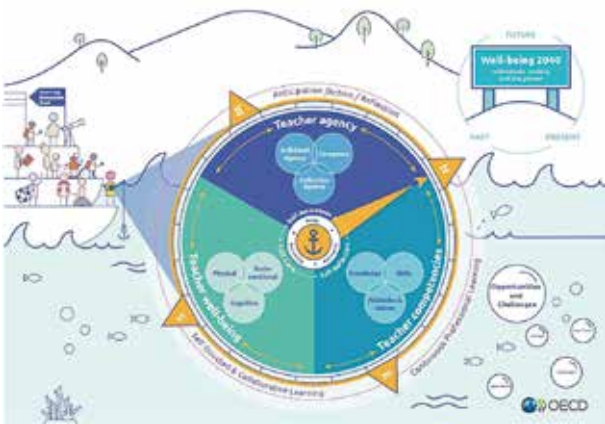
この教師像は、私が研修現場で実
感したことと重なります。先回りは、
一人で未来を見通すことではありません。
振り返り、問いを立て、仲間と対話

しながら視野を広げていく。そのプロ
セスの中で初めて、先回りすることが
できる、つまり未来への判断や行動が
可能になると考えます。

ここで重要なのは、「未来志向」と
「現場の困り感」を対立させないこと
です。先生たちの今に寄り添い、足
場を整えることは、未来を諦めるこ
とではありません。むしろ、未来を
見るために必要な条件を整える営み
です。この順序を誤らないことが、研
修を設計する側にも求められていると
感じています。

文部科学省が示す「令和の日本型
学校教育」では、教師が主体的に学

Figure 2. OECD Teaching Compass



OECDティーチング・コンパス（教師の羅針盤）：日本語訳

び続ける存在であること
が前提とされています。
「新たな教師の学びの姿」
は、研修として与えられ
る学びだけではなく、日
常の実践や省察、同僚と
の対話を通して形成され
る学びです。教師が自ら
の実践を問い直し、その
学びを共有できる文化が
あってこそ、先回りする
教育は持続可能になるの
ではないでしょうか。

かもしれません。今ここにある困難や
迷いに丁寧に向き合い、人との関係
性や学びの文化を育てながら、少し
ずつ時間軸を広げていく営みではない
かと思います。仲間とともに未来を
見る。そのプロセスそのものが、私に
とっての「先回りする教育」になるの
ではないかと、最近では考えています。
研修という場を通して、先生たち
が明日を迎える足場を少しでも安定
させ、子どもたちにより多くの良質
な種をまく。そのサポートができる
よう、これからも試行錯誤を続けて
いきます。

【参考文献】

- ・文部科学省 (2021) 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』
- ・文部科学省 (2021) 『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて(審議まじり)』
- ・OECD(2025)『OECDティーチング・コンパス(教師の羅針盤)：日本語訳』<https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/teaching-compass/Teaching%20Compass%20full%20document-Japanese%20translation%20teacher%20compass%20REV.pdf>(参照:2026-01-08)

【特集】

なぜ「オモシロがる」ことが教育の鍵なのか 私の考える「先回り」の教育

はじめに

教育は、もっとオモシロくなれる

「これからの教育に必要なものは何でしょうか」

この問いに、即答できる人は案外少ないのではないだろうか。

学力？ ICT（AI）？ 探究？ それとも非認知能力でしょうか。

私は長年、全国の学校現場や教育研究の最前線を取材してきました。

その中で次第に強く感じるようになってきたのは、制度や手法以前に、「教える側がどれだけ学びをオモシロがれているか」が、子どもたちの学びの質を大きく左右しているのではないかと

いうことです。

この度、貴研究所『EduMate』への寄稿の機会を頂戴し、大変光栄に存じます。民間教育事業会社での経験しかない私が、由緒ある研究誌に筆を執ることは身の引き締まる思いがあります。

私は2013年から約10年間、ベネッセ教育総合研究所のWebマガジン編集長として、全国の教育実践の取材や調査研究等の情報発信に関わってきました。「総合」と名の付く

同研究所では、幼児教育から大学、教育委員会や国の政策までを幅広く扱い、編集者という立場から教育の

全体像を俯瞰する機会にも恵まれました。

本稿を通じて私がお伝えしたいのは、これからの教育の鍵は「オモシロがること」、あるいは「オモシロがれる環境づくり」にあるのではないかと

いう問題提起です。これまでの経験

を踏まえつつ、日本の教育を取り巻く環境変化と政策の流れを概観しながら、これからの学び——私なりに

考える「先回りの教育」とは何か、そしてそのためになぜオモシロがるこ

とが大切なのかを述べてみたいと思います。

正解のない時代に、私たちは何を学ぶのか

冒頭の「これからの教育に必要なものは何か」という問いに対して、UCAと呼ばれる不確実な時代においては唯一の正解は存在しません。それでも私たちはつい、「正しい答え」を探そうとしてしまいます。

しかし、正解が定まらない問いに対して必要なのは、「自分はどう考えるか」をまず言語化できることだと

考えます。そして、自分なりの解と他者の解を持ち寄り、対話を通して理解し合い、状況に応じた最適解を

合意形成していくこと。これこそが、

これからの社会で不可欠なことではないでしょうか。

この合意形成の営みを国家レベルで行っているのが、中央教育審議会（以下、中教審）をはじめとする教育政策の議論の場です。ただ、対話や合

意形成はあくまでプロセスであり、学びの最終目的そのものではありません。では、学びの目的とは何でしょうか。

「私」と「社会」は、どうすれば一緒に幸せになれるのか

学ぶという行為は、本来きわめて個人的な営みです。人類は長い歴史の中で、生き延びるための知恵や技

術を学び、やがて「好きなこと」に没頭する。「関心を深める」といった、より豊かな学びへと広がってきました。

詳細は省きますが、幼児教育において育みたい「子どもの姿」のために「質の高い遊び」が重要視されているように、遊びのように「夢中になる

経験」は大人にとっても学びを推進する原動力です。実際、多くのノーベル賞受賞者が「好きなこと（探究したいこと）」に没頭した経験を研究者としての原点として挙げていま

す。

幸福学などでも指摘されていること

ですが、一人一人の「個」が自分らしく特性を生かし、好きなことを通じて「社会」に参加できることは、大きな幸福感につながります。究極的には、一人ひとりが持ち味を発揮しながら社会と関わり、平和な世界をつくること—それが学ぶことの大きな目的なのではないでしょうか。¹⁾

日本の教育は、何を引き継ぎ、何を置き去りにしてきたのか

ここで結論的なことを述べますが、私はこの「個」と「社会」双方の期待値の調整が歴史的に十分行われてこなかったことに、今日の日本の諸課題の多くが由来しているのではないかと考えています。

日本の近代教育は、明治維新後の「学制」に始まります。当時の国家目標は富国強兵と殖産興業。軍隊と工場を効率的に動かす人材育成が教育の主目的でした。共通して求められたのは、「教えられた通りに」「速く正確に」「再現できる」能力。そのため時間に時間・規則・規律が徹底され、個々の興味や創意工夫が入り込む余地はほとんどありませんでした。この構造は形を変えながら長く温存されてきたと言えるでしょう。

第二次世界大戦後、新憲法のもと

で学習指導要領は9回（1947年の試案も含めると10回）改訂されてきました。経験主義から系統主義、

基礎学力重視、ゆとり教育（総合学習の時間）、そして主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング、ICT教育、小学校における英語と道徳の教科化等）へと変遷してきました。現在も2030年度から実施予定の次期改訂に向けた議論が続いており、AIの教育活用も重要テーマとなつていきます。²⁾

ここで指摘しておきたいのは二点です。一つは、明治維新や戦後の社会体制の激変は、必ずしも民意による合意形成から始まったものではなかったこと。もう一つは、膨大な時間と叡智を投入して改訂される学習指導要領も常に「決定版」ではなく、変わり続けているという事実です。

私がこの二点から推察するのは、「社会」体制が必ずしも最初から重視してこなかった「個」にとって最適な教育³⁾について、後から追いかけるように中教審という合意形成の場で具

近時ようやく「個」と「社会」が

目指す方向がウェルビーイングという概念に収斂しつつあるようにも見えます。⁴⁾

なぜ、優秀なのに幸せになりにくいのか

次期学習指導要領の改訂に向けた中教審の議論において、「好き」を育み、「得意」を伸ばす⁵⁾、「多様性の包摂」が目指すべき方向性の中核的

概念の一つに掲げられています。これは一つの理想的人材像を押し付けるのではなく、「個」の特性やしたいことを生かしながら、「社会」も幸せな状態（ウェルビーイング）を目指すと

いう意思表示だと私は受け止めています。³⁾ このように学びのゴールとしてウェルビーイングを目指すとする方向性は、OECDによって示された考え方にも合致していると考えられます。³⁾

ただ、課題はまだ山積しています。

たとえば、PIISAの好成績に反して子どもたちの低い自己肯定感、世界トップレベルの国際成人力（PIAAC）に反して日本の国際競争力の低下傾向、増え続ける教員の精神的負担、直近のTALIS調査でも社会

的評価が低いと感じる教員が多い現状などです。⁴⁾

これらの一見矛盾するような課題の根底には、個人的な仮説として、「個」の能力を十分に発揮しにくくす

る日本社会の特性（一律に同じであることが「普通」⁶⁾前提であると捉える傾向）も関係しているのではと考えています。いじめや不登校、子どもたちの自殺が高止まり傾向にも影響しているのではないのでしょうか。

学校を取り巻く「普通」⁶⁾と考えられてきたこと⁷⁾をもっと柔軟に捉えていくためには、まだ時間を要するかもしれませんが、子どももや教員がこれほどまでに生きづらさを感じる昨今の状況は、「個」と「社会」のウェルビーイング実現のために改善していきたいものです。³⁾

一人一人にわたる「普通」なウェルビーイング

では、子どもも大人も世界でトップクラスの「能力」があるのに、幸せではなかったり、イノベーションが起こりにくかったりする現状に対して、何ができるのでしょうか。その問いに対する答えも一様ではないですが、日本社会が突き付けられている極め

て本質的な問いだと思えます。間違いないと言えることは、この問いに対して日々実践を通して最適解を見つけようとしているのが教員だということです。

です。そのために教員の皆さんがどれだけ尽力されているかは、改めてここで説明するまでもないでしょう。

だからこそ敢えて提言するならば、もはや学力という社会がこれまで要請してきた「能力」だけでは全てが

解決できない段階に突入しているのではないか、もっと個人の「特性」や「好きなこと」に寄り添った教育によって、もっと豊かな社会がつかれるのではないか、ということですよ。

正解のない時代に突入したことで、偏差値の高い学校に進学していけば安泰な人生が待っているという時代は終焉を迎えています。それでもなお、日々の学習が将来の何に役立つかもよく分からないまま、「いつか役立つ」「大人になれば分かる」と苦行を強いられているような子どもたちがまだいるのではないのでしょうか。

ウェルビーイングの実現とは、言い方を換えれば、「いつか」ではなく「今この時」の充実もしっかり追求しようということだと思います。子どもには子どもの今日の幸せがあるのであって、大人になった時のために大切

な子ども時代を犠牲にしていはいはずありません。子どもたちも一人一人、普通に毎日を幸せに過ごしたいはずですよ。

教員の皆さんには、子ども時代の充実を全力で実現する応援団長であってほしいと願っています。そのため

のあらゆる創意工夫が「先回りの教育」だと私は考えています。⁶⁾

私が考える「先回り」の教育とは

ここで言う「先回り」とは、将来を予測して教え込むことではありません。「子ども一人一人の「今」の興味や「普通」の違いを起点に、学びの環境を整えることを指しています。

その核心は「オモシロがる」ことです。「オモシロがる」ことには、イイ・ワルイや優劣もありません。決まった型もありません。そのかわり、いかにオモシロがるか、その瞬間を起点に子どもたちといかに深く「コミュニケーション」できるかは、教員自身の経験値が物を言います。AIには決して代

替できない、圧倒的にリアルな体験に基づいて発せられる言葉や溢れる感情が必要だからです。つまり、子どもたちに先んじて経験した様々なことをもとに、オモシロがる引き出しを増やしておいて、

目の前で起る子どもたちの成長や変容を共にオモシロがること、喜び合えること、それが私が考える「先回り」の教育です。

もちろん、すぐにできることは限られるかもしれませんが、意識を変えるだけでも発想が変わり、やがて行動へとつながるかもしれません。もう少し具体的にオモシロがる目的や方法などに触れたいと思います。何かのヒントになれば幸いです。

【目指す子どもの姿】

- ・ 学校で、先生と友達と過ごす時間、学ぶことがオモシロいと思えている状態
- ・ 毎日が楽しい、明日が待ち遠しいと思えている状態

【方法】

- ・ 共に日々の生活、学び、成長をオモシロがる
- ・ 教員が感じたオモシロさを言語化して子どもに伝える
- ・ 子どもがどう思ったのかも言語化してもらおう

- ・ 子どもがオモシロいと感じることをもっとオモシロくできる方法や、アイデアの生み出し方を一緒に考える

- ・ 教員がオモシロがる姿は、それ自体が子どもたちへのポジティブフィードバック

【評価】

- ・ 学ぶ姿勢をしっかりと見とり励ます、結果で否定しない
- ・ 評価は優劣判定や序列決めではなく、成長機会の発見やフィードバックのため
- ・ 対話の際は、失敗を減点ではなく学習データとして扱い、材料にする

- ・ 興味や好きなことから子どもが自ら広げた学びを言語化し、成長の過程や意味を共有し、次のステップにつなげる（形成的評価）

【学級運営方針】

- ・ 子どもたちを変えるのではなく、環境をオモシロく変えるインクルーシブな思想

【学校の在り方】

- ・ 知識伝達の場合から、関係性と探究に愛着を感じられるオモシロい場所へ
- ・ 子どもも教員も保護者も対等で、学びを楽しみ、地域や人生全体



謎解きと心残り

「目の前の生徒たちが日々、謎のメッセージを送ってくるところが学校です」なんていうと、謎解きかミステリーツアーのちらしのようなですね。お知り合いの先生と、「匿名であれば本が何冊も書けますよね」というくらい、学校では想像を超えたことが起こるんです……。

謎解きのヒントは様々なところに隠れています。最も多いのは、その子の友達からの情報。「〇〇は〇〇らしい……」、「信憑性の度合いが不明でもとりあえず情報として収集。「〇〇は〇〇してた……」、「先日の情報とは違うけれどこちらも蓄積。そして日々の観察も。教室移動の時には誰と歩いていて、何時ごろ学校に来ていて、どの部活に入っていてどんな状況で、普段は誰と仲良しで、放課後は誰と帰っていて、どんなお弁当持ってきていて、制服のシャツはどんな感じで、

好きなプロ野球やサッカーのチームはどこで、推しは誰で、習い事や通っている塾はどこで、保護者のお仕事は何で、家族構成から兄弟姉妹の在籍学校名などなど。本を読んでいるふりをして、こっそり生徒同士の会話を聞くのは朝飯前です。ある生徒と話しながら、他の生徒の話も耳に入れることも時々あります。産業スパイの下、端くらいはできそうですね。

「マ切れの情報をつなぎ合わせるのはパズルみたいですが。そのピースをあてはめて全体像を見られるようになる頃には、卒業も間近だったりしますけど……」。

生徒指導事例集にはよく「欠席しがちな生徒で、家庭は〇〇で父親は□□、母親は△△、兄弟は▽▽。なので家庭では××××。こういう時に担任としてどうしますか？」と書いてあるのですが、実は担任がわかる

のは傍線部だけ。〇〇も□□も△△も▽▽も××××もすべては手探りです。家庭調査票だって100%正しいことは稀です。時には真実を書いてくれないことも……。担任して1年以上たつてから、「えっ、そうだったの？」というこもしょうちゅうです。パズルのピースには時に攪乱項も入っています。

就労先が「会社員」っていうのもよくあります。私だって（すごく昔ですが）交通違反でお巡りさんと対面した時、「職業は？」と聞かれて「主婦です」と答えました（嘘ではないと思いたい……）。そんな私に職業を言わせる以上に、「担任としてどうしますか？」に到達する前は長いんです。

ピースが突然進むことがあります。カウンセラーの先生が書いた事例集を読んで、「これかも!!」というのにヒットした時です。ピースのはめる場

所が、少し見えてきた感じですが、「もしかしたらこの子も同じかも……」。聞きたい!! でもどう聞く?」直球なので策を巡らせ、機を狙います。

そんな時に自分を支えてくれるのは、意外にも雑談です。わざとらしくない程度に話を振ります。「メヒアって、広島にもいるのね」と言うと、別の野球好きの生徒が説明してくれました。「あの……君に聞きたいんじゃないやなくて、あの子と話したいんだけど……」なんてそぶりも見せずに話を続けます。残念。次回に期待。

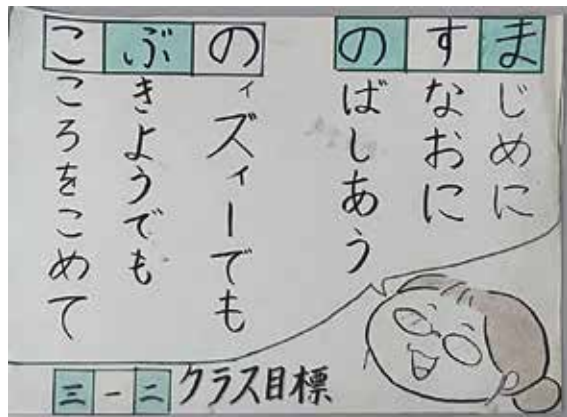
「うまる」のあいいうえお作文で学級目標を決められそうになった時は、「語尾に なんとかじゃないよ」とつけてください。」と言った瞬間に、「知ってる……」「まずい」となり、提案取り下げ。良かった……担任の強権発動しなくて……。そして「干物妹」と

いう共通の話題ができました。「ハンターハンターって知ってる?」「うちの息子、セーラームーンの映画を見に行くんだけど、どう思う?」女子生徒の好きなものとは、けっこう隔たりがあり難しかったです。「私の好きな韓国時代劇」と「生徒の好きなK-POPアイドル」は似て非なるものですが、そこを無理してつなぐ努力をします（私にはアイドルさんは皆同じ顔に見えるんですけどね……）。担任の能力の一つに、「雑談」をあげたいです。いわば、いくつもの無駄球を投げながら、時を待つ感じですよ。

生徒は、なかなか自分の「困りごと」を伝えてくれません。伝えられる雰囲気を作っていくことと、その場を持つことは、学校の大切な仕事であると思っています。そのために、年に何回か個人面談をします。一人10分でも生徒40人なら400分、約7時間です。これを、始業前と昼休みと放課後に割り振ります。始業前はせいぜい2人、昼休みも2人、放課後頑張って5人入れて、よし、これなら6日間ぐらいで何とかかなりそうだと思います。朝忘れちゃう人、放課後部活に夢中になって遅れて来る人がいて、予定は必ず延長します。そして、たいていの面談では、大した収穫???



嬉しいひと時のひとつ



似てる? 似てる!

は無く雑談に終わります。でも、その中でたまさかの「当たり前」に希望を託して、時間を使います。

昔勤めていた学校の非常勤講師の数学の先生に、「僕は生徒と関わる担任業務が好きじゃない。だから、非常勤講師と塾講師でいたい」と言う方がいました。そういう考えもよくわかります。生徒の抱えている課題は、担任や学校で解決できることは実は少なく、生徒が卒業した後、もうずーっと心に残っています。「あの時は立場上言えなかったけれど、と気になる生徒は本当に多いです、あの時は立場上言えなかったけれど、対にありません。

人間には、「あなたのことを我が事のように思う」幸せ、「気にかける存在がいる」幸せがあるような気がします。学校という職場は、そんな人の関わりがたまっているところですよ。なんて担任が言おうものなら大騒ぎになりそうですが、大変だった生徒が数年後に見違えるようになって戻ってくる姿をいくつも見ている自分は、つい、「そんなに気に病まないでもいいと思いますよ」と言いたくなり、そして言えない自分に悶々としています。こうしていつまでも残る気持ち、授業だけで関わった生徒には絶対にありません。

近思うようになりまし。この気づきが手遅れではないことを願うばかりです。



「化粧の自由化」を

自律性支援から考える

皆さんはVUCAという言葉をご存じでしょうか。急激に変化する社会の特徴を表す言葉で、Volatility（変

動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取っています。現在の日本の学校教育には、いま

を高めることが大事です。自律性を高める働きかけを「自律性支援」といいます。

典型です。「なぜ守らなければならないのか」という明確な根拠がないまま強制することは、生徒の考える力を阻害することが懸念されます。

学校現場も例外ではありません。IGAスクール構想による急速なデジタル化（変動性）、生成AIの急速な普及（不確実性）、多様なルーツを持つ生徒の増加（複雑性）、ジェンダレス制服の登場（曖昧性）など、従来の正解が通用しない予測困難な事態に直面しており、これらはまさにVUCAを象徴しています。

だけに他律的な規律やルールが強く残っている側面があります。その象徴が「校則」です。学校運営や生徒の人権や安全を守るために必要な校則がほとんどですが、近年、「ブラック校則」という言葉があるように、制定から年月が経ち、現代の感覚や科学的根拠を欠く校則も散見されます。たとえば、ソックスの色を白や紺色、黒色限定と指定する校則もその一つです。足元の色が学習効果や安全性に影響を及ぼす科学的根拠は乏しく、画一性を強いるだけのルールは、生徒が状況に合わせた服装の使い分けを自ら判断する機会を奪い、自律性を摘んでしまう可能性があり

ます。特に化粧に関する校則もその間を経て、髪の毛の色や化粧について

の校則を段階的に廃止しました。愛知県立愛知商業高校はキャリア教育の一環として生徒会主導で毎週金曜日を「私服登校日」としており、2024年からオフィスメイクも解禁しました。2025年には、広島桜が丘高校が髪の毛の色や化粧を禁止する校則を撤廃しています。

現在、化粧は一般的な自己表現の手段となっており、SNSの普及も相まって、日常的な営みとして定着していると言ってよいでしょう。大学や社会生活では、化粧は「社会的なマナー」や「身だしなみ」として推奨されることも多くなっています。近年では校則を試験的に自由化し、生徒の主体的な判断に委ねる学校も現れ始めています。たとえば、岐阜市の岐山高校は2023年、約3週間の頭髪・化粧に関する規定の廃止期間を経て、髪の毛の色や化粧について

先日、高校における化粧の自由化について、私の授業（教育心理学）を履修する学生101名を対象にアンケートを実施しました。このアンケートでは、「新任教員として赴任した高校で化粧が自由化したら」という仮定の下、化粧の自由化のメリット、デメリットを尋ねました。今回は

VUCA時代の社会を生き抜くために、生徒の「考える力」をいかに育むかが教育の最重要課題のひとつとなります。生徒自身が自分の考えや価値観に基づきながら、自分の行動を主体的に決定できる「自律性」

を高めることが大事です。自律性を高める働きかけを「自律性支援」といいます。現在の日本の学校教育には、いま

を高めることが大事です。自律性を高める働きかけを「自律性支援」といいます。

現在の日本の学校教育には、いま

阻害することが懸念されます。

化粧の自由化のメリットに関する



図1 化粧の自由化により想定されるメリット

学生の自由記述結果を分析したところ、回答は6カテゴリーに分類できました(図1)。

アンケート結果から考察できるのは、化粧の自由化が単なる「身なりを派手にする」こと以上の意味を持つということです。特に、化粧によってコンプレックスを解消し、自己肯定感を高めることは、対人コミュニケーションの積極性につながる可能性がある

ります。これは将来、多様な人々と協働する社会で重要な基盤となると思われます。

また、「社会に出る練習」として化粧を捉える視点は、キャリア教育の観点からも無視できません。自分に合った身だしなみやTPOに応じた表現を試行錯誤することは、自律的な判断能力を育むための貴重な実践の場となります。加えて、校則へのス

「だから化粧は禁止すべきだ」という結論を安易に出さないようにすることです。

むしろ、こうした混乱が生じた際に、「どうすれば学びの場にふさわしい自由が保てるか」を生徒に考えさせ、対話を通じてルールをアップデートしていくプロセスそのものが、自律性支援の本質といえます。高価な化粧品を持ち込みはどう対処するか、

では化粧について「清楚を旨とする」という表現になっています。こうした変化は、生徒の個性と人権を尊重しようとする現代社会の大きな変化に合致します。

VUCA時代には「答えのない問いに向き合う力」が求められます。答えのない問いに向き合いながら生徒が自分で試行錯誤し、自分なりの正解を見つける経験を積ませることが、現代社会に求められる教育の在り方です。これから教育の道を歩む皆さんに期待したいのは、既存の価値観について自分自身で考え、アップデートし続けることです。化粧の自由化は、単なるルールの変更ではなく、生徒を「信じて任せる」という教育観の転換でもあります。皆さんが自信をもって生徒の自律性を尊重し、その成長を柔軟に支えながら、学校教育をより豊かで、より活気のあるものへと変えていくことを願っています。

トレスや反発心が減るといえる点は、他律的に抑圧されていた生徒が、自らの意思で行動を選択できることで学校への嫌悪感が弱まり、より前向きに学校生活を送る素地を作っていくといえます。本稿では触れられませんが、したが、デメリットとして経済格差、化粧による格差、学業への支障などを学生は挙げていました。当然ながら、長年維持されてきた校則を変更し、化粧を自由化すれば、初期段階での混乱は避けられません。授業中に化粧を直す生徒の出現、鏡を求めてトイレが混雑する問題、あるいは高価な化粧品の持参による紛失や盗難といったトラブルが予想されます。しかし、重要なのは、想定されるこうした混乱か

授業と休み時間の区別をどうつけるか。こうした実社会でも直面する問題を、自分たちの手で解決していく経験こそが、生徒の考える力を高めます。化粧がやや派手になっている生徒に「今の場にそのメイクは適切だと思う?」と問いかけながら、生徒と一緒に考える生徒指導を行うことが望まれます。生徒が失敗したり悩んだりする姿を見守り、必要に応じて対話を試みる「忍耐強い支援」が大切です。

今後、高校における化粧の校則は、「一律禁止」から、例えば「華美なもの控え、清廉なものに限る」といった、より包括的で緩やかな内容へと移行していくことが予想されます。そこに生徒が判断する自由と責任が生じ、対話の余地が生まれます。前述の岐山高校のHP(※1)

※1 岐阜県立岐山高校HP <https://school.gifu-net.ed.jp/gizan-hs/gaiyou/doc/studentrules.pdf>



サンプルであるようになり

～注目の多い学習指導要領とその周辺への異議～

1. 生き急ぐ世の中

世の中全体がせかせかせか過ぎていくと感じるのは私だけでしょうか？
時間に追われ、心は焦り、余白やゆとりが失われれば失われるほど、カリカリしてしまい、世知辛さが増しているような気がしてなりません。

学校現場もまた余白やゆとりが失われています。雪だるま式に増える社会的要請、それに伴うBuild & Build型の教育改革を背景にして、注目の多い学習指導要領とその割に整わない条件整備という現実が学校現場は疲弊しています。

最近、よくVUCAの時代だと言われるものの、学校は有限の資源で成り立っています。「子どものため」に、やらないよりはやった方がいい、それはそうですが、教育を提供する側がパンクしてしまつては、元も子もありません。あれもこれも求めるが

ゆえに、すべてが中途半端になつてしまつと、最終的に最も不利益を被るのは子どもです。教育界隈において、「子どものため」はマジカルワード、いやキラワードであり、その言葉を

使われると反論しづらく、ある種の思考停止状態を招きます。社会の変化に乗り遅れないようにと危機を煽ることで、私たちは子どもたちを生き急がせていないでしょうか？ 子どもたちは子ども期を謳歌できているのでしょうか？ コロナ禍以降、いわゆる「タイパ意識」が強まりをみせています。そんなに急いでどこに行くのでしょうか？ ほっとひと

息ついて、肩の力を抜いた教育論議が、今こそ必要だと私は痛感しています。

息ついて、肩の力を抜いた教育論議が、今こそ必要だと私は痛感しています。

2. カリキュラム・オーバーロード問題

車両の場合、最大積載量を超えて荷物などを積載して運転することは法的に禁止されており、罰則の対象となっています。それだけ過積載(overload)による運転は非常に危険な行為だとみなされています。では、学校教育の場合はどうでしょうか？ 私からすると、学校現場はやらなければならないことが多すぎる、過積載状態です。代表的なものに、カリキュラム・オーバーロード(カリキュラムの過積載)とワーク・オーバーロード(教師の過重労働)があります。前者については、表のように整理されています(OECD、2022)。

これらオーバーロードは、国内外を問わず、看過できない問題になっています。ただし、学校教育の場合、車両のように「重さ」という明快な基準で判断できないため、どの程度の状態をオーバーロードとみなすのが非常にあいまいであり、論者によつても異なります。何らかの操作的な定義が必要になりますが、紙幅の都合上、この点は別稿に譲ります。

次期学習指導要領改訂の議論においても、その一つの柱に「実現可能性(Feasibility)の確保」が位置づけられ、授業時数の適正化・標準化、教科書の精選、構造化、裁量的な時間など、様々な方策による教師・子ども双方の「余白」の創出に向けた検討が行われています。教育「内容」のみならず、標準授業時数や単位授業時間、年間最低授業時数などの「時間」に注目したことは特筆すべきことだと言えますが、現状の改訂議論の延長線上に、オーバーロード問題の解消に向けた明るい希望を見出せない私がいいます。

これらオーバーロードは、国内外を問わず、看過できない問題になっています。ただし、学校教育の場合、車両のように「重さ」という明快な基準で判断できないため、どの程度の状態をオーバーロードとみなすのが非常にあいまいであり、論者によつても異なります。何らかの操作的な定義が必要になりますが、紙幅の都合上、この点は別稿に譲ります。

次期学習指導要領改訂の議論においても、その一つの柱に「実現可能性(Feasibility)の確保」が位置づけられ、授業時数の適正化・標準化、教科書の精選、構造化、裁量的な時間など、様々な方策による教師・子ども双方の「余白」の創出に向けた検討が行われています。教育「内容」のみならず、標準授業時数や単位授業時間、年間最低授業時数などの「時間」に注目したことは特筆すべきことだと言えますが、現状の改訂議論の延長線上に、オーバーロード問題の解消に向けた明るい希望を見出せない私がいいます。

3. 本当に最低限？

問題はさまざまありますが、こ

表：カリキュラム・オーバーロードの4つの側面

カリキュラムの拡張 (Curriculum Expansion)
新たな社会的要請に応じて、なにを削るべきかを十分に検討しないまま、カリキュラムに新しい内容を次々と加えていく傾向。
内容の過多 (Content Overload)
指導に割くことができる時間に対して、教えるべき・学ぶべき内容が過剰に多い状態。(カリキュラム過重のうち、教師や学習者の感じ方ではなく、実際の量としての側面)
認知／経験された過負荷 (Perceived Overload)
教師や学習者が認知または経験されたカリキュラムの過密さや過負荷。(カリキュラム過重のうち、教師や学習者の主観的・体験的な側面)
カリキュラムの不均衡 (Curriculum Imbalance)
優先度が低いとみなされた領域をきちんと見直さないまま、特定の領域にばかり多くの時間や重点が割かれ、他の領域がおろそかになる状態。

OECD (2020) Curriculum Overload: A Way Forward. より筆者作成

では、根本的な問題である学習指導要領そのものについて課題提起しておきます。学習指導要領は、現状、各学校が教育課程を編成する際の大綱的な最低基準、すなわち、ミラマ・エッセンシャルズだとされており、その基準には法的拘束力が伴います。

「最低」であるにもかかわらず、実際のところ、制度的に保障された時間をほぼフルに使わないと、各教育内容を十分なレベルで取り扱うことができない基準になっています。それを「最低」と呼ぶには無理があります。「最低限」を定める基準なのであれば、次期学習指導要領に向けて議論されているような、裁量的な時間を導入する「以前」に、そもそも学習指導要領の記載内容それ自体を、本当の意味での「最低限」に減らすことが、まずもって求められるのではないのでしょうか？ その影響たるや、カリキュラムのみならず、入試や教科書検定など多岐にわたるわけですから。また、すべて足し合わせるのと数千ページにも及ぶ学習指導要領の解説もなくしてしまつてはどうでしょうか？ 法的拘束力がないと言われますが、実質的には様々な場面で多大な影響をもたらしているのは確かです。

各自自治体や学校の実情に応じて、多様性を包摂できるようにする。そのために、現場裁量の余地を増やすというのは、もちろん、大切なことであり、聞こえもいですが、基準や関連ルールが複雑になればなるほど、各校単位のカリキュラム編成作業はより複雑になり、それを管理する自治体の各教育委員会を含めた現場の負担は明らかに増大することが予想されます。

カリキュラム・オーバーロードとワーク・オーバーロードは分けて考えるべきという意見もありますが、そもそも所定の勤務時間内に教材研究や教員研修の時間すら十分に取れない現状もあるわけです。実際のところ、制度設計する際に、例えば、一つの単元または授業をデザインするうえで、評価を含めて、どのくらい事前準備や事後対応の時間が必要となるのか、その見積りすら、明確にされていません。もし、この問題を抜本的に解決しようと思つたら、クラスサイズではなく、各教員の週あたりの授業持ちコマ数に応じた教職員定数の算出にその基準を変えるべきであり、学習指導要領の改訂は、カリキュラムをつくり、動かしていくうえで制約条件となる、こうした関連制度の再設計とセットで進める必要があるはず。学校教育を大幅にアップグレードしようとするなら、なおさらです。

4. 減らす、そして、シンプルに
学校教育の成功定義はなにか？ 欲張りたくなる気持ちをぐっと堪えて、なにを本質的に大事にするのか？ これだけは絶対に学校教育で学び取ってほしいことはなにか？ 本心に、本当に大事なことはなんなのか？ この問いを突き詰めて考え、その大事なことが以外に思い切つて減らす決断が不可欠ではないでしょうか？ 減らすことは決して消極的なことではありません。逆説的に聞こえるかもしれませんが、多様性の時代だからこそ、むしろ、共通性にこそ注目の必要があり、複雑な時代だからこそ、むしろ、シンプルの方がいい。現場がクリエータータイプであるためには、私は今、そんな仮説をもとに探究しています。詳細はまたの機会に。自治体や学校現場のクリエータータイプを喚起する制約のつくり方をもうと考えてみる価値があるはず。制度が変わってくればと思いつつ、現場からできることもたくさんあります。今、その挑戦を始めているところ。おもしろくてタメになる学校教育の実現に向けて、減らすための思想と方法論を一緒に確立してみませんか？ 先回りの旅路は続く。

教育の最新事情

型とその伝承、そして教育（三） やわらかな制度としての「口伝」

1. 外庄と内庄の相克

誰しも、学びの過程で「前より分かるような気がする」と思ったにも関わらず、教師からの指摘をきっかけに「分かっていったつもりなのに、今度は分からなくなった」となることがあります。これは、自分の中で「分かったつもり」の精細度が高まったことを意味しているのかもしれませんが。

筆者は、長年慣れ親しんだ古流武術（居合剣術）の経験を踏まえ、繰り返し身体に練り込まれた「型」が、備えようのない事々々に向き合う術としての「実践知」を育む視座を紹介してきました。この実践知は、「標準化されたプロセス」としての型を体得した身体が、同一状況に対する再現性ではなく、異なる状況に同一型性を見出した時に生成され、実践（実戦）における「結果の多様性」を齎します。その過程で修業者は、「守破離」という、型との新たな関係を結び直すための漸進的革新に挑み続けるのです（薬袋2025）。

一方、「型にはめる」という表現があるように、型は、修業者に対して外生的に押し付けられた作業手続の束といえます。その自律性ゆえに、外部から操作されにくい性質を持つ人間存在に対して、他者である師に

できることは「気づき、見守り、声をかける」ことです。従って、型を通じた教育には「口伝（くでん）」という補助装置が不可欠なのです。

古流武術のひとつひとつの型には、流儀独自の工夫を込めた勝ち筋の物語が表現されています。例えば剣術では、熟練の上級者が務める打太刀が、立合の状況を決定づける技を仕

掛け、修業者が務める仕太刀が、流儀の勝ち筋を示す技を放つて勝つ、といった各々が予め定められた懸待の役割を演じます。型の集積によって流儀が成立しますが、そこには、流儀内に共有される勝ち筋の「貫通表現（西山1969）」としての技が特異な無形資産として顕れ、流儀の識別を可能とするのです。

2. 口伝が型を活かす

口伝は、口頭での情報伝達以上の意味を持ち、伝書等の記録媒体では十分に伝達し得ない身体感覚（剣法）や心の有り様（心法）を、稽古場における師弟関係の下で、その時々

の感覚の言語化を以て受け渡すという点に、その本質的意義が認められます。古流武術には、間（時間）、拍子（タイミング）、間合（距離）、正中の移動（重心）、目付（視点）、

気位（威風）といった俄かに言語化困難な身体感覚があり、また、理合（因果）や道理（哲学）など、所作だけからは伺い知れない、型の背後にある意図や論理も存在します。これは、身体を通じた伝承によるみ

理解可能な領域であり、口伝はこれらの要素を損なうことなく保守するための方法であるといえます。従って、古流武術における全ての技や型の稽古において、口伝を授けられる機会が存在することになります。しかしその機会は、一律平等に開かれていない訳ではありません。師は弟子の資質や習熟度を見極めたうえで「託すに値する」と判断した弟子に対して、段階的且つ適切な場面を選んで口伝を授け、弟子はこれを契機として、自身の身体動作を補正し、師の動きを写し取る過程を繰り返すことで技や型を体得するのです。

一面において、口伝は秘匿性を備え、「秘伝」と呼ばれる非公開技法の伝授に口伝を介すことから、流儀の格式を維持する役割を果たしてきました。伝書が存在しても、口伝がなければ理解困難な技法も多いために、口伝を授かること自体が、修業者の到達点の証とされることもあり、この秘匿性は、伝系を同じく

する流儀共同体の結びつきに寄与し、その伝承に独特の魅力と緊張感を与えてきました。

しかしこれは、教授法としての口伝の意義とは別の側面であり、秘伝

なる制度は、流儀という共同体における経営戦略上の概念と言ってもよいでしょう。そもそも古流武術が、徒弟制の下で個別に教授される以上、意図せざる結果として、口伝において何が語られたかが、当事者間に閉じた伝承となり、文脈によっては秘伝に転化してしまうこともあります。それが秘伝である以上、伝承者同士が互いにその内容を照合することすら困難となるかもしれません。

3. 剗那に語り、剗那に黙す

むしろ、口伝として語られる言葉の束は、ある種の断章であり、発話によって創造された瞬間に消尽されるという意味で剗那的ですね。その「剗那」に、言葉と身体が共にあることが重要なのです。従って、師には、精神論を弄ぶことなく、実相としての身体性を追い求め、他者に気付きを伝えようとする真摯な態度が求められます。伝承は、カーボンコピーを量産することではありません。託すに足る修業者が、今こそ

気付くべき一瞬を迎えた時、師は、その剗那を捉え、果敢に自らの感覚を言葉にして伝え、同時に、黙すべき相手や場面には、敢えて口を噤むのです。

十七世紀の剣豪・宮本武蔵は、類稀な合理性と言語化能力を持った兵法者であり、名著『五輪書』の『水の巻』は、自ら創始した剣術の基盤理論を記した伝書です。その巻頭で武蔵は「自ら試して、書かれています。以上のものを知れ」と宣言した上で、本来、口伝として弟子に授けたであろう言葉を綴っています。その一節から、教育において口伝が担う境界領域を垣間見ることができるとでしょう。

一、はりうけと云事

はりうけと云は、敵と打合時、とたんとたんと云拍子になるに、敵の打所を、我太刀にてはりあわせ打也。はり合する心は、さのみきつくはるにあらず。又うくるにあらず。敵の打太刀に應じて、打太刀をはりて、はるよりはやく敵を打事なり。はるにて先をとる、打にて先をとる所、肝要也。はる拍子能あへば、敵何とつよく打ても、少はる心あれば、太刀さきのおつる事にあらず。能習ひ得て吟味有べし。(筆者訳：張り受けとは、敵と打ち合うタイミングがトタントタンと噛み合わなくなった時、敵が斬り込む瞬間に己の太刀を合わせて「受け」打つことである。その心構えは、必要

以上に強く打つてもなく、ただ受けるでもない。斬ってくる敵の刀に合わせ受け、その受けよりも早く敵を打つことだ。受けて機先を制し且つ打ちでも機先を制することが肝要である。敵が如何に強く打ち込んできても、タイミングよく受けることができれば、また打つ気位があれば、当方の剣先が崩れて負けることはない。よく稽古し吟味せよ。)

一、打あいの利の事

此うちあひの利と云事にて、兵法太刀にての勝利をわきまゆる所也。こまやかに書するにあらず。稽古ありて、勝所をしるべきもの也。大形兵法の美の道を頭す太刀也。口伝。(筆者訳：打ちあいの利とは、兵法の太刀捌きを通じて如何に勝ちに至るかを確信し見極めた状態をさす。細かく書き記す類いものではなく、稽古を積み自ら悟るべきである。これこそ兵法の真髄を顕わした太刀使いであり、口伝する他ない。)

前者は、相反する受けと打ちの身体動作が一つの技に内在する勘所を、感覚や心得と共に詳述する一方、後者は、概念のみで内容の展開がありません。武蔵は、語るべきことと黙すべきことを峻別し、それが流儀の核心であるが故に、情況依存的な「個人知」の固定化を避けたと考えることができます。

4. 伝承を支える「やわらかな制度」

このように、教授法としての口

伝は、「やわらかな制度」(マーチ他1994)であり、適切性の論理に貫かれています。口伝は、師が伝達すべき内容を選別することで、技や型の無秩序な変質を防ぐ防波堤として機能する一方、時代に応じた柔軟な変化を可能とする仕組みでもあります。

伝書の記述は、技法の固定化を招き易く、複製可能性が事態を更に進行させますが、口伝は、師が、その時代背景や修業者個人の資質に合わせて微調整を加えつつ伝えることで、伝統を損なわない範囲での改良や更新が可能となります。口伝という教授法は、型に不変性と可変性が併存する余地を与え、世代を超えた担い手の変遷に耐えうる伝承教育の自己組織化を促したといえるでしょう。

【参考文献】

- ・ジエームス・G・マーチ、ヨハン・P・オルセン(遠田雄志訳)(1994)『やわらかな制度：あいまい理論からの提言』、日刊工業新聞社。
- ・薬袋貴久(2025)「型とその伝承、そして教育(二)：「守破離」と踊り場の効用」『昭和女子大学教職課程研究報』、vol.9、pp.15-16。
- ・宮本武蔵・魚住孝至(校注)(2005)『定本・五輪書』、新人物往来社。
- ・西山松之助(1988)『芸の顔：伝統と前衛』、秀英出版。

先輩はもがく、されど進む

昭和女子大学で教職課程を学び、教師になった先輩から後輩へ。今回は教師以外の道を選んだ先輩からも、もがきながら、苦しみながら、それでも前に進む頼もしい先輩たちのリアルな言葉をお届けします。



小学校（公立）

向山 優那 先生

初等教育学科 卒業

私はこの4月から、公立小学校で教諭として働いています。全てのことが新しく、日々ついていくことで必死だった4月が、今では随分と前のことのように感じられますが、振り返ってみると、本当にあっという間の1年でした。

ポジティブが取り柄の私ですが、この1年、なかなか前向きに過ごせないこともありました。授業や生活指導、学級経営など、悩みは尽きません。自分の思うようにいかず、今でも毎日のように悩んでいます。

それでも、学校に行くと、そこにはいつも笑顔で「先生」と声をかけてくれる子供たちやいつも気にかけて温かく支えてくれる先輩の先生方、同期の仲間がいます。エネルギーな子供たちと過ごす毎日は変化の連続で、とても楽しく、そんな環境で働けていることに幸せを感じています。

教師という職業は、日々、結果が子供たちの姿となって表れる仕事だと感じています。だからこそ、日々の出来事に一喜一憂しすぎず、どんな表情も大切に受け止めながら、子供たちと歩んでいきたい。これが、今の私の目標です。

4月から教員として勤務し約10か月が経ちました。「やりがい」という言葉だけでは、どうしても乗り越えられないと感じる日も、何度もありました。転職が当たり前になりつつある中、それでも私が教員を続けたいと思う理由は何なのか、日々考えています。いくつか理由はありますが、最も大きいのは、楽しいと思える瞬間がわずかでもほぼ毎日あり、1日があっという間に過ぎていくことです。教員の仕事は多岐にわたり、「もう無理だ」と思うこともありますが、退屈だと感じることはほとんどありません。例えば「先生！今日こんなことがありました！」と何気なく声をかけてくれる生徒の一言に、思わずほっこりする時もあります。こうした日常の些細な出来事に支えられながら、毎日を過ごしています。

教員を目指し、来年度からの生活に不安を感じている方もいるかと思いますが、悩みながらも一歩ずつ進んでいける仕事だと感じています。同じ現場に立つ一人として、来年度からともに学びながら歩んでいきましょう！



中学校（公立） 社会科

相良 愛美 先生

歴史文化学科 卒業



中学校（公立） 国語科

稲田 春花 先生

日本語日本文学科 卒業

現在、中学1年生を教えています。4月は学校について覚えることが沢山あります。授業も手探りで、隙間時間や休日も活用して授業準備や教材研究を行いました。单元ごとに生徒へのアンケートを実施し、授業改善を重ねていくと生徒から「授業が楽しくて分かりやすい」と言われる事も増えてきました。生徒の柔軟な思考や考えから学ばせて貰う事が沢山あり、私自身が日々勉強させてもらっています。

業務に慣れてきた頃、養護教諭から「親として接しなさい」と言われた事があります。

保護者よりも先生と関わる時間の方が長いという生徒もいるかも知れません。親の立場で考えて関わる事を意識しています。

学生の皆さんには、色々な分野に興味を持って履修することをお勧めします。大学での学びがいつか自分を助けてくれるはずです。

どの職業でも働く上で大変な事や辛い事もあると思います。私自身「もう駄目だ」と思う日もあります。それでも生徒の成長を間近に見る事ができる、とてもやりがいのある仕事です。教員を目指す皆さんを応援しています。

私は現在、仙台で広告系の仕事をしています。大学では4年間、教育学を学んでいましたが、大学生活の中で海外旅行や多くの人との出会いを経験し、学校以外の世界も知ってみたいと思うようになりました。大学4年生の1月、内定先から仙台配属を告げられ、入社後は東京で研修を受けたのち、5月から仙台で働き始めました。仙台支社は2024年に立ち上がったばかりの支社で、立ち上げメンバーの1人としてジョインしました。現在は3名で東北・北陸・新潟を担当しています。慣れない土地での仕事は想像以上に大変で、自分の未熟さを痛感する毎日でした。そして今も、毎日四苦八苦しながら頑張っています。これだけ聞くと、社会人は大変そうだなと思うかもしれませんが、悪いことばかりでもないのが社会人のようです。仕事を通じて出会った人や偶然出会った人に支えられ、一生懸命な1年を過ごすことができている。どんな道を選んだとしても、きっと社会人1年目は大変です。だからこそ、しんどい時に思い出したくなるような思い出を、大学生活でたくさん作ってみてください！



宮城 民間

中山 ころこ 先輩

初等教育学科 卒業

Pickup News

Showa Women's University Institute of Modern Education 2025



Core-PJ

先3からはじまる教育の未来

先生による、先生のための、先回り研修会Ⅱ「先3」（さきさん）。今年のテーマも、「守破離」の「破」！「夢」を語り、未来を「予告」し、好奇心をくすぐる「秘密」の仕掛けを考え、「副」教科の逆襲を企み、思考のタガを「壊」す体験を経て、最後は「先」回り実践のショータイム。

第1限目は「夢を語る」。全国の先生たちが13文字の自己紹介で空気をゆるめ、教育の夢や教師の魅力を本音でシェア。子どもたちの未来に希望を灯す学びや、好奇心をくすぐる授業、教師という仕事のクリエイティブさと影響力に再注目。最後は「すてきなことを考えよう」というピーターパンの言葉で締めくくられました。

第2限目は「予告する」

がテーマ。山下正太郎さん（ヨココク研究所）のレクチャーでは、未来を「予測する」から自ら「予告する」主体的な姿勢の大切さを学び、実践ワークでは、自分の想いを言葉にして「ヨココク」として発信。対話を通じて深まり、共鳴が生まれる体験を味わった私たち。教育も未来も、自らの手で「のろし」を上げてつくっていくセッションに。

第3限目は「秘密にする」。教育番組の企画・制作を手掛ける志賀研介さんは、「ふしぎ」を残すことが好奇心を育てると語り、続く、クリエイティブ・ディレクターのキリーロバ・ナージャさんは「知らない」は冒険の始まりだと提起。答えを与えず問いを引き出す姿勢が生む学びの連鎖。ワークでは、日常に潜む「ふしぎ」を探し出し、探究のスイッチをオ



先³

先生による
先生のための
先回り研修会

時間割	1	2	3	4	5	6
	夢	予	秘	副	壊	先

先3特設 web サイト

<https://saki3.swu.ac.jp/>

三菱みらい育成財団 Web サイト

<https://www.mmfe.or.jp/partners/3147/>

ン。授業に「秘密」を仕込むことで、もっと知りたい気持ちがある自然にあふれ出すことを発見しました。

第4限目は「副教科の逆襲」。アナログゲームやフィッシュンなど、子どもたちの「好き」を起点に社会とつながる実践が紹介され、副教科の持つ可能性に注目が集まりました。学びは教科に

収まらず、興味から未来へ広がるもの。ワークでは「好き」を軸に新たな部活を妄想し、学びの入口は多様で自由であることを実感。副教科は、未来への扉だったのです。

第5限目のテーマは「壊す」。美術家である金城満先生の授業「家族の肖像」や「石の声」など、静かで

深い衝動を生み出す実践にふれ、思考の枠を外す意味を体感。教え子・館林恵さんも、自身の内面が揺さぶられた経験を語りました。破壊ではなく、丁寧に自分と向き合う「壊す」が、創造と問いを生み、教育の本質を照らし出すーそんな時間でした。

最終回は、いよいよ「先回る」。先回り実践のシヨertime! メンバー達の冒険物語、未来の学びが、今ここに。

現代教育研究所紀要 第11号



<論文>

私立学校の役割再考ーオルタナティブ教育との関係からー (友野 清文)

メタ認知獲得を促す幼児期・児童期における系統的指導ー教師の言葉がけによるメタ認知知識の獲得ー (高島 扶貴・鈴木 浩之)

日本語学習におけるモチベーションの文化的差異ー自己決定理論に基づく漢字圏・非漢字圏出身者の比較ー (大野 直子)

VUCA 時代における生徒支援の在り方ー生徒支援する力を高める教員養成の展開ー (葉山 大地・鈴木 高志)

ビジネスパーソン教育でのディベート学修における事実説明議論と事実的政策論題の適用 (高雄 慎二・薬袋 貴久)

<研究ノート>

子どもの豊かな量感覚の育成ー水遊びを通した環境設定の意義ー (師澄江・志村 富子)

小学校体育科アクティブ・ラーニング実践の検討に向けた予備的研究ーデューイの教育思想を手がかりにー (田島 宏一)

<実践報告>

幼稚園教育におけるデジタル音楽表現の可能性ー DAW ソフトを用いたサウンド制作の実践と保育現場での活用の検討ー (永岡 都・高島 扶貴)

養護教諭特別別科の学生を対象とした教養英語の実践ー動画の活用で学習意欲を促進ー (岡崎 伸一)

<資料紹介>

河崎家の教育ー関係者からの聞き取り調査の事例からー (豊田 千明)

Project

子どもが輝く教室をデザインする：「実践型」英語教育の最前線

生成AIの驚異的な進歩により、教育のあり方が根本から問われています。英語教育プロジェクトは、研究所の設立以来、理論と実践をつなぐ役割を担いながら、多様な視点から研究活動を進めてきました。

その活動の一環として、2025年11月には講師として本大学の元学長・名誉教授の金子朝子先生を招いた英語教育サロンを実施し、今後の英語教育のあり方について情報を共有しました。今回の「英語教育サロンー英語教育の未来を考えるー」では、理論を深化させるだけでなく、具体的な実践知を学ぶ貴重な機会となりました。

次年度からは、これまでの英語教育サロンでの知見を発展させ、次世代の英語教育を支える柱となる高度な英語運用能力・実践的英語指導力の育成を目指し、教育現場での即戦力となる探究型ワークショップを実施する予定です。英語教育サロンは、幼・小・中・高の先生方が日々抱える「英語への苦手意識を持つ児童・生徒に、どのように『わかった！』の笑顔を取り戻させるか」「拡大するクラス内の

学力差に、どのように一人ひとりに応じた指導を実現するか」「日々の児童・生徒の個々の習得度合いを評価することを目的とした、形式的評価をどのように行っていくか」「生成AIをどのように授業で活用するか」といった切実な悩みに

寄り添い・提案する場となることを目指しています。子どもが輝く教室をデザインする情熱ある皆様プロジェクトへの参加を、心よりお待ちしております。



Project

先生だって悩んでる…その先のヒントをゲット

私学教育研究プロジェクトでは、2019年度から毎年、教員育成に関わる公開セミナーを開き、先生方に様々な立場の方と交流する機会を提供しています。

今年度は11月24日（祝）に、『迷ったらGOOー』ー生徒の背中を押す校長先生が描く私学教育』と題して、横浜隼人中学・高等学校長の朝木秀樹氏のお話を伺い、意見交換を行いました。朝木先生は、東京大学在学中に野球部で活躍され、約30年の銀行勤務の後、私立学校の事務長や高校の野球部監督を務め、2024年度から現職につかれています。先生は、大切にしたいこととして、「主体性とリーダーシップ」「課題発掘力」「コミュニケーション力」「行動力」を挙げ、また「生徒自身がやりたいことを見つけ、それに全力を注げるようにすること」を支えたいとおっしゃっていました。

着任後に実施した、「無駄の排除」（朝の小テスト廃止等）、「必修科目の時数削減」「自由選択科目の増加」「外部講師による特別授業」「高大連携の拡充」については、聴衆はその「後日談」に興味津々。

また今後すべきこととして「教員の意識改革」「生徒指導の考え方の整理、校則の見直し」「業務改革」を挙げられました。さらに、これまで学校を外側から見てこられてきた立場から、教師のプロ意識や、変化を嫌う（あるいは変化についていけない）学校や教育制度の問題を指摘されました。

私学教育研究所ではこの他、冬に教職座談会を実施して、本学の教員志望の学生たちに、教職の魅力や私立学校についてお伝えしています。



Project

科学の楽しさを伝えたい！ ―国際シンポで考えたこと

2025年7月21日の国際シンポジウムで、3つのサイエンスショーを見ました。講師とテーマは、①現代教育研究所：白数哲久「海の生き物を守ろう」、② NP



○法人ガリレオ工房：早川詩音・望月恵子「空飛ぶクジラ」、③バナン大学航空・光メカトロニクス工学科（台湾）：周鑑恆「熱機関と発電の原理」で、参加者は約

70名でした。

古くはフアラデーのクリスマスレクチャーに遡るサイエンスショーですが、日本では、1996年から（財）省エネルギーセンターによる1000人規模のショーが盛んにおこなわれるようになり、ステージ用実験の開発をNPO法人等が担ってきました。コロナ禍においては舞台上からサイエンスショーは消えていきましたが、代わりにSNSによる実験動画の配信が盛んにおこなわれるようになりました。今日では、YouTubeフォロワー100万人超の若手パフォーマーがサイエンスショーを牽引し、さいたまスーパーアリーナでフェスを行うなど、大きなムーブメントが起きています。テレビ番組に実験が登場するなど、科学を楽しむ文化は浸透したと言えるでしょう。ステージでは、より派手な実験が求められるようになりつつあります。しかし、私

たちはそこに、「科学がよくわかる楽しさ」を盛り込む必要性を感じています。「見て楽しい実験」と「実験から考えを深めていくこと」、両者のバランスや見せ方の検討が欠かせません。

3つのステージでは共通して、「伝えたい科学」がありました。そして、演者が考案・自作した実験が登場しました。ステージでは、演者の全身から科学のすばらしさを追究する熱量を感じましたし、参観者にクイズ

を出したり語りかけたりしつつ、一緒に実験を成功させようとして一体感を生み出すなど、会場を巻き込む演出が光っていました。これらの点は大いに参考になるところです。

余談ですが、台湾から来てくれた周鑑恆さんと参観者はとても親しくなりました。科学のワクワク感を共有することで、科学が人と人をつなぐことにも気づけた、そんなシンポジウムになりました。





昭和女子大学現代教育研究所
Institute of Modern Education
Showa Women's University

現代教育研究所は、本学園の建学の精神に基づき、
現代的な教育問題を発見、探究、解決するとともに、
これからの時代にふさわしい教育の実現に向けて、
新たな価値を創造することを目的とする研究所です。

総合学園としてのよさと強みを活かし、
学園内外の研究者、教育関係者はもとより、
様々な教育機関や研究機関、行政機関、民間機関と広く連携を図り、
研究成果の発信や提言、社会実装などを行っていきます。

時代の流れに敏感でありつつ、それに流されることなく、
教育のあり方について自由闊達に対話、探究し、
社会や学術にインパクトをもたらす拠点にしていきます。

WEBSITE : <http://iome.jp/> **MAIL** : kyoikuken@swu.ac.jp

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate
vol.10

■編集■

EduMate 編集部

■発行■

昭和女子大学現代教育研究所

■発行日■

2026年3月2日